

【研究ノート】

市立函館博物館所蔵潤潟コレクション

大矢京右

はじめに

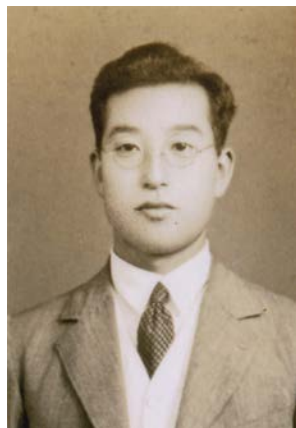
市立函館博物館は、ウイルタ関係資料の一大コレクションである「潤潟^{まがた}コレクション」を所蔵している。国内にウイルタに関する資料がそう多くはない中で、収集時期や収集者が明確で一定のまとまった量のある潤潟コレクションは、非常に貴重な資料群であるといえる。

そこで潤潟コレクションの旧蔵者である潤潟^{まがたひさはる}久治のライフヒストリーおよび研究歴、ならびに市立函館博物館に収められた潤潟コレクションの概要について、市立函館博物館所蔵資料と北海道大学附属図書館所蔵資料¹、そして潤潟の遺族や関係者からの聞き取り調査によって得られた情報などを元に紹介することとしたい。

1. 潤潟久治のライフヒストリー

1-1. 戦前

潤潟久治は1898年5月に函館で生まれ、地元の弥生小学校を卒業した後、「中国語とともに、その頃就職に有利な語学」【北海道新聞1979】という理由で1911年4月に函館商業学校へ「露語兼修者」として進学し、1916年3月19日に予科2年・本科3年の「五ヶ年精勤」で卒業した。同年4月には大阪商業会議所に事務職員として就職し、さらに1922年4月15日に大阪外国語学校ロシア語部へ「委託生」（官庁や学校、企業の委嘱に応じる学籍）として入学。潤潟在学当時の大阪外国語学校の学長は中目覚^{なかのめあきら}²であり、後に潤潟が「大阪外語大ロシア語科を卒業した時に恩師から、だれも手をつけないウイルタ語の研究を勧められ」【北海タイムス1979】たとしていることから、この進学が潤潟の研究人生に大きな影響を与えたといえる。



潤潟久治 (1931年撮影)
【速水康子氏提供】

1925年3月19日に大阪外国語学校を卒業した後、潤潟は同年4月10日付で福島高等商業学校にロシア語の助教授として就職する。詳細な研究歴については後段で述べるが、潤潟は同校在籍時から1981年に病没するまで、ウイルタ語の研究をライフワークとした。後に『ロシア語を研究するのは“アカ”だ』という当時の反リベラルの風潮に耐えられず【北海道新聞1974a】、1934年2月28日付で福島高等商業学校を辞職するも、1935年5月には函館で日魯漁業株式会社の外事係社員（ロシア語通訳）として就職し、同社からは「更に研究の利便を与え」【樺太日日新聞1935】られてウイルタ語研究を継続することができた。

1-2. 戦中・戦後

1937年の日中戦争勃発以降極東地域の情勢が不安定になる中、潤潟も1945年6月に札幌市の北部軍司令部に陸軍教官（ロシア語通訳）として、同時に北海道庁警察部外事係（嘱

託)として赴任することになる。そしてそのわずか2ヵ月後には終戦で職を失い、故郷の函館で友人宅に間借りしながら職と住居を探さざるをえなくなった。1949年に市営住宅に当選して住居は確保できたものの生活は困窮を極め、戦前に樺太で収集した民族資料のほぼ全てを市立函館博物館に売却。その後1956年2月に日魯漁業株式会社に再就職してようやく生活は安定し³、1968年以降は三井船舶株式会社ソ連材輸入船の嘱託通訳も務めるなどしながら、1975年頃までロシア語通訳として仕事を続けた。

1979年に白老町在住の次男夫婦の元に身を寄せた後、1981年3月23日、潤潟は自らの研究の集大成ともいえる『ウイльта語辞典』の刊行を目前にこの世を去った。白老町での葬儀に出席した網走市在住のウイльта、ダーヒンニェニ=ゲンダーヌは「心の底からウイльта民族を愛してくれた人で、私たちはマパーチャアンマ（おじいちゃんの意味）と呼んで親しんでいました。（中略）心に大きな穴が開いたようです。」【北海道新聞1981】とし、その死を悼んだ。

2. 潤潟久治の研究歴

2-1. 戦前

2-1-1. 研究の端緒と樺太渡航

潤潟の研究歴は、戦前（主に1928年から1935年頃まで）と戦後（主に1975年頃に日魯漁業を退職して以降）に分けることができる。

まず潤潟がウイльта研究を志した端緒であるが、前述の「恩師から、だれも手をつけないウイльта語の研究を勧められ」という理由の他、「地元の学術振興財団から研究費が支給されたものの、当初予定していた満州（現中国の東北部）の治安が悪いため調査地を樺太に切りかえた」【苫小牧民報1980】という消極的な理由も挙げている。そして戦前の調査研究は樺太でのフィールドワークが中心であるが、潤潟1981の「はじめに」に書かれたものについて、以下に要点をまとめる。

- ①1928年：齋藤報恩会の研究助成を受けて、サチカリ～ノコロ～ケウリで調査。
- ②1930年：オタスを中心にタラン、タライカ川付近で調査。
- ③1932年：オタスを中心にタライカ湾岸の中利耶からナイプトー帯を往復。
- ④1935年：「熊祭」に招待され、約10日間オタスに滞在。

ただし、研究の端緒としている齋藤報恩会からの「オロツコ語文典及辞典編纂事業」に対する研究助成は、1930年（300円）・1931年（350円）・1932年（700円）・1934年（400円）の計4回支給されているが、1928年の助成実績は確認できない【財団法人齋藤報恩会編1931・1939など】。また樺太への最終渡航を1934年とするものや【北海道新聞1974b】、1933年にも樺太渡航している報道が確認されるなど【樺太日日新聞1933】、正確な渡航歴を把握するのは困難である。ただ調査経緯がタイムリーに報告されている1928年（掲載紙不明記事⁴）、1930年（潤潟1931）、1933年（樺太日日新聞1933）の少なくとも3回については樺太で調査を行っていると考えられる。

2-1-2. 調査内容と研究成果

実際に潤潟が行ったフィールドワークの内容については、1930年に行われた調査が潤潟1931において詳らかにされているので、参考までに以下に要点をまとめる。

- ①渡 航：1930年7月9日に福島を発ち、途中函館図書館、北海道史編纂室、豊原博物館

等で資料調査をして、同月19日夜に敷香に着く。

- ②第一期：敷香を中心に、幌内河畔サチカリのウイльтаに聞き取り調査。盛漁期のため研究効率はあまりよくなかった。(7月20日～31日)
- ③第二期：タライカ湾沿いの漁場で就労するウイльтаに聞き取り調査。漁場主の厚意で比較的長時間調査ができ、研究効率が大きく上がる。(8月1日～15日)
- ④第三期：大半のウイльтаが山に入り、残った者も準備で忙殺されるため、2人にしか聞き取り調査できなかった。(8月16日～20日)
- ⑤退 島：8月23日に敷香を出発。30日に大泊から退島する。

また調査に際して「当時の日本にはオロッコ民族の文献がなく、予備知識も全くなかったことから、カバの木で作った住居で寝起きをともにして」【北海道新聞1974b】「物をとらえては、“ウリ・ハイヤ？”(これは、何ですか)の連発だった」【北海道新聞1974a】とする一方、ウイльта語やニヴフ語の会話ができたと半澤中⁵が調査に同行していたという情報もある【宇仁1999:64】。

このようにして得られた研究成果は、前述の掲載紙不明記事(1928年)と潤潟1931の他、山本1930に掲載されたウイльтаやニヴフに関する小解説(潤潟久吉名義⁶)、樺太日日新聞1935などにみることができる。

2-2. 戦後

戦後潤潟は、北海道に移住したウイльтаへの聞き取り調査を行った。北海道内におけるフィールドワークについては、前述した樺太渡航歴と同じく、潤潟1981に次のとおりまとめられている。

「昭和35年2月、網走で約15日間北川五郎さん、小川明さんからウイльта語資料を得、昭和51年10月、52年5月、10月、53年10月、54年4月あわせて約40日間釧路市で佐藤チョさんからウイльта語を聞いた。」【潤潟1981】

1975年頃まで日魯漁業で就労していたためか、1960年の調査後1976年までしばらく期間が空いているが、1970年代のウイльта文化復権運動の高まりや北海道教育委員会によるウイльта民俗文化財緊急調査は、潤潟の調査研究に少なからず影響を与えたであろう。また、ダーヒンニェニ=ゲンダーヌが「おとし(1979年、筆者注)の春、潤潟先生がジャッカドフニを訪れて下さって以来のお付き合いです。私はウイльта語辞典を作っていた先生にイントネーションとアクセントを助言しました。」【北海道新聞1981】としていることから、潤潟1981に記載された以外にも聞き取り調査を行っている事実がある。

これらの調査研究で得られた成果は戦前の調査研究成果と合わせて、北海道教育庁社会教育部文化課編1980・1981、そしてそれらを1冊にまとめた潤潟1981などに結実している⁷。

3. 市立函館博物館所蔵潤潟コレクション

3-1. 潤潟久治旧蔵購入資料とその同定

潤潟久治は、1928年以来50年以上にわたるウイльта研究のなかで多くの民族資料や図書資料などを収集しているが、その内民族資料は前述のとおり市立函館博物館に売却し、写真資料や図書資料などは北海道大学附属図書館に寄贈している。また2011年には、潤潟の遺族から市立函館博物館に潤潟の遺品4点が寄贈されている。



資料に付された整理番号のテプラやコレクション番号を記入したラベル（民族1876）

1979年3月31日以前に市立函館博物館に収蔵された民族資料は市立函館博物館編1979に掲載されているのだが、同書には資料1点1点に関する掲載情報が多くなく、一読しただけではどの資料が潤潟久治旧蔵購入資料か判断できない。そこで以下の手順で資料の同定を行った。

まず市立函館博物館の資料購入帳簿である「土俗資料備品供用簿」⁸をみると、1949年11月19日付「オロッコ土俗服■」「3点1組」「潤潟久造」「10,000円」（整理番号2）、同年12月10日付「オロッコ皮手袋」「1足」「潤潟久造」「1,500円」（整理番号1）、1951年

12月5日付「北方民族資料」「76点」「潤潟久造」「50,000円」（整理番号6～40）を確認することができる。函館博物館所蔵民族資料の中にはこれらの整理番号がテプラやアップリケなどで付されたものがあり、資料同定の一つの根拠となる⁹。また、「市立函館博物館旧資料カード」には潤潟コレクションとして54枚が綴られており、M1～54の潤潟コレクション用の番号が付されている。函館博物館所蔵民族資料の中にはこれらのコレクション番号がタグや直接注記などで付されたものもあり、整理番号同様資料同定の根拠となる。

これを受けて「土俗資料備品供用簿」と潤潟コレクションの「市立函館博物館旧資料カード」、そして資料に付された整理番号やコレクション番号を照合し、筆者による計測値と備考を加えて作成したのが稿末一覧の「購入資料」である¹⁰。これら56件92点の内いくつかは、潤潟1981などに「函博蔵」として画像が掲載されているのが確認されるほか、「風俗写真」（民族1864）については佐々木・赤澤2000に全35種が掲載されている¹¹。

3-2. 潤潟久治旧蔵寄贈資料

この資料は、晩年の潤潟と生活をともにした潤潟洋子氏から2011年7月21日に寄贈されたもので、稿末一覧の「寄贈資料」4点である。首飾りの収集の経緯等はわからないとのことであるが、名刺からは潤潟の就労状況や研究活動などがうかがわれる。

おわりに

潤潟はロシア語の教師を勤めた時期もあったが、終生研究職に就くことなく、ロシア語通訳として生活の糧を得ながら「マチの言語学者」【北海道新聞1980】としての生涯を過ごした。しかし潤潟の収集した資料や研究成果は、今やウイльта研究における基礎資料の一つと言っても過言ではない。また公立博物館への一括売却によって、資料が散逸することなく戦後混乱期を乗り越えることができたのも僥倖であったといえよう。

市立函館博物館は潤潟コレクション以外にも、30点以上のウイльтаの民具資料や戦前の樺太で撮影された16ミリフィルム¹²などを所蔵している。これらの資料も合わせて、潤潟コレクションがウイльта文化研究はもちろんのこと、その保存や伝承に寄与することができるよう、活用の途を求めたい。

なお資料調査および本稿執筆において、主に潤潟のライフヒストリーについては昆陽子氏、速水康子氏、藤村一男氏、潤潟洋子氏に、主に潤潟の研究歴と資料の所在については

宇仁義和氏、小林流美子氏、猿橋キヨミ氏に重要なご教示をいただいた（50音順）。ここに記して謝意を表したい。

註

¹ 潤潟の遺族が寄贈した、潤潟久治旧蔵写真資料（人物写真4枚・「オロッコ族写真」7枚・「オロッコとギリヤークの民具」16枚・複写写真6枚）と潤潟久治旧蔵図書・遺稿類。前者はインターネット上の「北海道大学北方関係資料総合目録」（<http://www2.lib.hokudai.ac.jp/hoppodb/>）において閲覧可能である。

² 1912・1913年に樺太で「言語調査」を行った中目覚は、その成果を『オロッコ文典』（1917年）として出版しており、同書の序文で調査が十分ではなかったことについて言及するとともに「今より後、少壮学者が堅忍不拔の精神を以て精緻の研究を遂げ、オロッコ文法の大成せられんことを希望する」としている。また潤潟コレクション「風俗写真」の中には、「大正五・六年 中目氏の写真」と裏書きされたものもあり、中目と潤潟の繋がりがうかがわれる。

³ 潤潟が日魯漁業に就職・再就職した時期は、北洋漁業独占の契機となった太平洋漁業株式会社設立（1935年1月）や日ソ漁業協定締結（1956年5月）など、ロシア語通訳の需要増の時期とリンクする。

⁴ 北海道大学附属図書館所蔵の潤潟久治旧蔵資料中の切り抜き記事「樺太を尋ねて／潤潟教授のオロッコ研究」（6回連載、内第1回欠）で、掲載紙情報がない上、第4回以外は掲載年月日も不明である。ただし、第4回が1928年9月9日付であることと、記事裏面に野村胡堂が1928年から1929年まで報知新聞に連載していた「美男狩」が掲載されていることから、1928年の報知新聞に掲載されたものであると考えられる。なお、国立国会図書館所蔵報知新聞全国版（マイクロフィルム）では掲載が確認されないことから、地方版（当時潤潟が居住していた福島版か）に掲載された可能性が考えられる。

⁵ 樺太敷香で写真館を営み、土産用の写真や絵はがきも手広く取り扱った【宇仁1999】。

⁶ 「潤潟久治」の間違いと考えられる。以下「潤潟久造」も同。

⁷ これらの研究成果刊行の経緯などについては、池上1987に詳しい。

⁸ 1949～1966年に購入された民族資料112件が記載された台帳であり、整理番号、購入年月日、資料名、数量、金額、購入先などが記入されている。市立函館博物館編1979刊行以前の資料管理台帳である「市立函館博物館旧資料カード」中「購入資料目録」と内容が一致する。

⁹ 函館博物館所蔵民族資料に付されたラベルや前述の「市立函館博物館旧資料カード」の詳細については、大矢2015を参照。

¹⁰ NN01と NN02は市立函館博物館編1979に掲載されていないため、本稿で便宜的に付した仮番号である。

¹¹ これらの写真の中には「半澤中商店発行」のスタンプが押印されているものや、「半沢」「木村捷司撮影」など裏書きされているものも含まれている。

¹² 表題は「樺太原住民の生活」で、「スキーと体操」「豊原郊外旧露人の生活」「ギリヤーク人の生活」の三部で構成され、日本領樺太における日本人・ロシア人・樺太先住民族の生活状況が撮影されている（約8分34秒）。撮影者や撮影年代は不明であるが、1927年時点での統計表が映し出されるシーンがある。

参考文献

池上二良

1987 「「ウイльта民俗文化財緊急調査」をふりかえって」『北海道の文化』56:pp.12-20, 北海道文化財保護協会

宇仁義和

1999 「樺太敷香の写真家・半澤中の生涯と作品リスト」『知床博物館研究報告』20:pp.61-84, 斜里町立知床博物館

大阪外国語学校編

1922 『大阪外国語学校一覧 自大正十一年至大正十二年』, 大阪外国語学校

1925 『大阪外国語学校一覧 附第五臨時教員養成所一覧 自大正十四年至大正十五年』, 大阪外

国語学校

大矢京右

2015「函館博物館旧蔵資料ラベル考」『市立函館博物館 平成27年度特別展 千島樺太交換条約とアイヌ』pp.38-46, 市立函館博物館

樺太日日新聞

1933「潤瀉教授退島／ギリヤーク研究の篤学者」(1933年4月20日付)

1935「亡び行く民族研究に三年没頭の教授／オロツコの全貌紹介」(1935年9月16日付)

財団法人齋藤報恩会編

1931『事業年報 第六(昭和四年度)』, 財団法人齋藤報恩会学術研究総務部

1939『事業年報 第十四(昭和十二年度)』, 財団法人齋藤報恩会学術研究総務部

齋藤一郎

1991「ロシア語通訳の見た北洋漁業」『地域史研究はこだて』14:pp.79-91, 函館市

佐々木史郎・赤澤威

2000『モンゴロイド系諸民族の初期映像記録 —シベリア・北海道・樺太篇—』, 国際日本文化研究センター

市立函館博物館編

1979『市立函館博物館蔵品目録1 民族資料篇』, 市立函館博物館

田中了・D.ゲンダーヌ

1978『ゲンダーヌ ある北方少数民族のドラマ』, 株式会社現代史出版会

苫小牧民報

1980「マチの言語学者・潤瀉さん／世界初のウイльта語辞典／50余年の研究世に問う／道教委が発刊へ／文法書執筆へ新たな意欲」(1980年2月23日付) ※昆陽子氏提供

中目覚

1917『オロッコ文典』, 株式会社三省堂

函館商業学校編

1916「函館商業学校第十七回卒業生名簿」 ※函館市中央図書館所蔵

福島高等商業学校編

1934『福島高等商業学校一覧 昭和九年至昭和十年』, 福島商業高等学校

北海タイムス

1979「ウイльта語辞典を初めてまとめた／潤瀉久治さん(81)」(1979年5月11日付) ※昆陽子氏提供

北海道教育庁社会教育部文化課編

1980『昭和54年度 ウイльта民俗文化財緊急調査報告書(2) ウイльта言語習俗資料1』, 北海道教育委員会

1981『昭和55年度 ウイльта民俗文化財緊急調査報告書(3) ウイльта言語習俗資料2』, 北海道教育委員会

北海道新聞

1974a「日本で初めてオロッコ語辞書を完成した／潤瀉久治氏」(月日不明) ※昆陽子氏提供

1974b「滅びゆく北方民族の言葉を後世に／オロッコ語辞書完成／函館の会社員、40年の結晶」(1974年5月13日付夕刊7面)

1979「近く「ウイльта語辞典」を出す潤瀉久治さん(81)／夢がやっと形に／生活や文化を伝えたい」(1979年6月8日付夕刊5面)

1981「ウイльта語集録に半生／潤瀉さん死去／苦心の辞典(下巻)発刊目前に」(1981年3月24日付19面)

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会編

1997『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書』, 北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会

潤瀉久治

1931「オロツコ語文典及辞典編纂事業報告」『事業年報 第七(昭和五年度)』pp.231-233, 財団法人齋藤報恩会学術研究総務部

1981『ウイльта語辞典』, 網走市北方民俗文化保存協会

山本三生

1930『日本地理体系第十卷 北海道・樺太篇』, 改造社

掲載紙不明

- a 「樺太を尋ねて(二)／潤潟教授のオロツコ研究／酒と煙草は必需品／イロハも勉強する」(月日不明) ※北海道大学附属図書館所蔵潤潟久治旧蔵資料中切り抜き記事
- b 「樺太を尋ねて(三)／潤潟教授のオロツコ研究／酒飲みの悪い癖」(月日不明) ※北海道大学附属図書館所蔵潤潟久治旧蔵資料中切り抜き記事
- c 「樺太を尋ねて(四)／潤潟教授のオロツコ研究／珍しい天葬の習俗」(1928年9月9日付) ※北海道大学附属図書館所蔵潤潟久治旧蔵資料中切り抜き記事
- d 「樺太を尋ねて(五)／潤潟教授のオロツコ研究／原始的売買婚の風」(月日不明) ※北海道大学附属図書館所蔵潤潟久治旧蔵資料中切り抜き記事
- e 「樺太を尋ねて(六)／潤潟教授のオロツコ研究／クンガーの音に恋の囁き」(月日不明) ※北海道大学附属図書館所蔵潤潟久治旧蔵資料中切り抜き記事

(おおや・きょうすけ／市立函館博物館)

資料図版 (掲載資料は全て市立函館博物館所蔵)



上着 (民族 1868)



獣皮製長靴 (民族 1871)



団茶 (民族 1873)



敷物 (民族 1883)



口琴 (民族 1920)



小刀 (民族 1888)



木偶（民族 1894）



獣皮製煙草入（民族 1913）



火打ち用具（民族 1919）



樹皮製手桶（民族 1886）



ウイльта土産物（H23-003）



樹皮製手提（NN01）

市立函館博物館所蔵 濶淵コレクション

区分	受入年月日	整理番号	コレクション 番号	収蔵番号	資料名	別名	収集地/出土地	数量	寸法 (cm)	備考
1949年10月11日	2	M40	民族1868	上着	pokto	樺太東海岸 敦香近郊	1	191.0 W154.0	満州服仕立 絹木綿地 裏毛布地 補修跡多数	
		M41	民族1869	上着	pokto	樺太東海岸 敦香近郊	1	192.0	女性用平常着 木綿地3色海帯文様	
1949年12月8日	1	M42	民族1883	動物	belutu	樺太東海岸 敦香近郊	1	1109.0 W110.0	黒木綿地 色糸刺繍	
		M25	民族1870	獣皮製手袋	kotoptu	樺太東海岸 敦香近郊	1	126.0 W13.0	一組 5本指 本体トナカイ皮製 入口に色糸刺繍した黒木綿とトナカイ内毛	
6	7	M01	民族1866	上着	kuktu	樺太東海岸 敦香近郊	1	188.0	男性用 海狗脂仕立 茶・オレンジ地 補修跡多数	
		M02	民族1867	肌着	uribaku	樺太東海岸 敦香近郊	1	180.0 W146.0	男性用 薄手白木綿地 袖附近と袖口に黒木綿・刺繍 襟に貝製ボタン3個	
8	9	M03	民族1891	大鼓	da li	樺太東海岸 敦香近郊	1	173.0 W88.8	楕円形の木枠にトナカイ皮を張る シャーマンが折構の際に左手に持ち、右手に持ったばちでリズムをカルに打つ	
9	10	M04	民族1892	ばち	gisipu	樺太東海岸 敦香近郊	1	143.5	木枠を大皮で包む(一般的にはトナカイすね皮) シャーマンが折構の際に右手に持ち、左手に持った太鼓をリズムをカルに打つ	
10	11	M05	民族1893	治療用帽子	aripitu	樺太東海岸 敦香近郊	1	122.5 W5.0 H9.0	帽子掛けを編んで作った髷に木綿でダブダブの文様を縫い付け 頭痛の治療用	
11	12	M06	民族1911	行李	xulmeu	樺太東海岸 敦香近郊	1	138.5 W19.0 H25.5	内側は白樺樹皮を曲げて作り、外側をトナカイ皮で包んである 色糸刺繍 衣類などを入れ、移動の際にも使用	
12	13	M07	民族1912	獣皮製煙草入れ	padu	樺太東海岸 敦香近郊	1	120.5(結合)156.5) W12.5	巾着形 トナカイ皮製小袋に色糸刺繍 トナカイ皮製ストラップ	
		M08	民族1913	獣皮製煙草入れ	padu	樺太東海岸 敦香近郊	1	120.8(結合)171.5) W13.5	巾着形 トナカイ皮製小袋に色糸刺繍 トナカイ皮製ストラップ 皮紐の高端に青色ガラス玉6個ずつ 首から掛けて携行	
		M09	民族1914	獣皮製煙草入れ	padu	樺太東海岸 敦香近郊	1	122.5(結合)160.0) W14.0	巾着形 トナカイ皮製小袋に色糸刺繍 トナカイ皮製ストラップ	
		M10	民族1915	獣皮製煙草入れ	padu	樺太東海岸 敦香近郊	1	116.0(結合)134.5) W13.5	巾着形 トナカイ皮製小袋に色糸刺繍 トナカイ皮製ストラップ	
		M11	民族1916	獣皮製煙草入れ	padu	樺太東海岸 敦香近郊	1	114.0(結合)122.0) W11.8	巾着形 トナカイ皮製小袋に色糸刺繍	
		M16	民族1905	獣皮製提籠	xura	樺太東海岸 敦香近郊	1	117.5(結合)162.0) W23.0 H2.0	トナカイ皮製の肩掛け物 本編製肩掛け部分等に色糸刺繍	
		M17	民族1906	獣皮製提籠	xura	樺太東海岸 敦香近郊	1	119.5 W23.5 H3.2	トナカイ皮製本体に柄糸綿で縁取り・裏打ち 表面にウイタルタ文様刺繍	
14	15	M15	民族1881	魚皮製小物入れ	kitasu xureni	樺太東海岸 敦香近郊	1	123.0 W31.5 H3.0	鯨皮製本体に鯨皮製細紐巻き付け 裁縫道具を入れるのに使用	
1951年12月5日	16	M12	NN01	樹皮製手提		北海道か	1	122.0(結合)134.5) W19.5	※商品目録未掲載資料 樹皮製本体に黒木綿切伏 色糸チェーンステッチ 樹皮製提紐付	
		M13	NN02	樹皮製手提		北海道か	1	120.5(結合)140.0) W18.3	※商品目録未掲載資料 樹皮製本体に黒木綿切伏 色糸チェーンステッチ 樹皮製提紐付	
17	18	M29	民族1925	砥石	piwo	樺太東海岸 敦香近郊	2	大: L17.0 W8.0 H4.0 小: φ7.7	自然石2個	
19	20	M43	民族1926	獣皮製財布	gumarinikka	樺太東海岸 敦香近郊	1	118.5 W11.0	トナカイ皮製本体に色糸刺繍文様	
		M14	民族1917	魚皮製小物入れ	segna xureni	樺太東海岸 敦香近郊	1	114.0 W30.6 H5.0	鯨皮製縫製 縁部分に黒・赤彩色 紐巻き付け 駄籠の付属物や薬罫草などを入れるのに使用	
21	22	M18-1	民族1907	獣皮製提籠	xura	樺太東海岸 敦香近郊	1	123.5(結合)160.5) W30.0 H4.0	海狗皮製本体にトナカイ皮製縁取り 木綿布で裏打ち 肩掛け部分は木綿製	
		M18-2	民族1908	獣皮製提籠	xura	樺太東海岸 敦香近郊	1	124.0(結合)193.0) W28.4	トナカイ皮製の肩掛け物 トナカイ皮製ウイタルタ文様貼り付け 木綿製肩掛け部分等に色糸刺繍	
23	24	M18-3	民族1909	獣皮製提籠	xura	樺太東海岸 敦香近郊	1	123.5(結合)174.5) W25.5 H4.0	トナカイ皮製の肩掛け物 木綿製肩掛け部分等に色糸刺繍	
		M24	民族1871	獣皮製靴	utta	樺太東海岸 敦香近郊	1	126.0 W10.5 H27.0	男子用夏靴 毛を取った海狗皮を縫製 虫歯多	
24	25	M26	民族1890	弾丸容袋	sumukka	樺太東海岸 敦香近郊	1	118.0 W11.0 H3.0	巾着形 皮製 文様刺繍 狩猟用弾丸を入れる	
		M27	民族1888	小刀	kuci	樺太東海岸 敦香近郊	1	136.8 W4.5 (刀身)113.0 柄)12.0 鞘)131.8)	鉄製刀身 木製柄 チョウゲナイ皮製鞘 魚肉や獣肉を調理加工するのに使用 ウイタルタによる野獣製	
26	27	M28	民族1889	小刀	gesu	樺太東海岸 敦香近郊	1	121.5 W3.0 (刀身)14.5 柄)17.0)	木柄付 細工用	
		M37	民族1920	口琴	kungga	樺太東海岸 佐知村	1	17.2 W1.8	フシライニシヨークトハラ制作(旧資料カードより) 鉄製 銅等劣化顕著 有孔	
27	28	M38	民族1921	口琴	kuqga	樺太東海岸 敦香近郊	1	113.5 W1.5	竹製 アイヌの口琴と同じ形態	

購入資料

区分	受入年月日	整理番号	コレクション番号	収蔵番号	資料名	別名	収集地/出土地	数量	寸法 (cm)	備考
購入資料		M54	民族1885	樹皮製手桶	kurkka	樺太東海岸 敷香近郊	1	L17.5 W5.5 H12.0	樹皮製本体に曲木製把手付 ウイルタ文様貼り付け	
		M39	民族1886	樹皮製手桶	kurkka	樺太東海岸 敷香近郊	1	L14.5 W17.0 H13.0	樹皮製本体に曲木製把手付 ウイルタ文様貼り付け	
		M44	民族1878	樹皮製容器	daktau	樺太東海岸 敷香近郊	1	L20.0 W16.0 H6.0	蓋付 樹皮製ウイルタ文様貼り付け	
		M45	民族1879	樹皮製容器	daktau	樺太東海岸 敷香近郊	1	L16.5 W15.3 H5.2	蓋のみ 樹皮製ウイルタ文様貼り付け	
		M30	民族1874	木製瓶	xuduraei itto	樺太東海岸 敷香近郊	1	L31.0 W17.0 H6.0	耳付木桶 水筒への供物(モニ)を入れるのに使用 儀礼後供物は削り掛けに包んで水の中に投げ入れる	
		M32	民族1875	さじ	xuniya	樺太東海岸 敷香近郊	1	L27.0	木製 柄に文様彫刻	
		M46	民族1899	人形	xoxo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L19.5 W5.7	子供用の遊具 木編製の芯材を色木綿や紙で包む	
		M47	民族1900	人形	xoxo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L17.0 W5.0	子供用の遊具 木編製の芯材を色木綿や紙で包む	
		M48	民族1901	人形	xoxo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L11.6 W4.8	子供用の遊具 木編製の芯材を色木綿や紙で包む	
		M49	民族1902	人形	xoxo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L13.0 W7.0 H4.8	子供用の遊具 木編製の芯材を白樺樹皮で包む	
		M19	民族1894	木偶	sewo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L36.0 W9.0 H7.0	木偶(目に青色ガラス玉)を削り掛けで包む	
		M20	民族1895	木偶	sewo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L22.0 W7.5	木偶(黒色)を削り掛けで包む	
		M21	民族1896	木偶	sewo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L22.3 W3.4 H6.3	木偶(黒色)を削り掛けで包む	
		M22	民族1897	木偶	sewo	樺太東海岸 敷香近郊	1	L9.7 W2.9	籠型 木製 有孔 用途不明	
		M23	民族1873	頭茶	ca'i	樺太東海岸 敷香近郊	1	L9.3 W12.0 H2.0	茶葉を蒸して固めたもの 表面山羊文様 裏面「BIBICOHAYU」	
		M50	民族1863	頭骨		樺太東海岸 敷香近郊	1		下顎骨を欠く	
		M31	民族1887	摺盤	amu	樺太東海岸 敷香近郊	1	L73.0 W38.0 H41.0	半円形の板に曲げた木片を付けたもの二つを樹皮で組み合わせ、内部に木綿布を張る 子守や寝乳に使用	
		M51	民族1864	風俗写真		樺太東海岸 敷香近郊	36	L12.7 W17.8	主にキヤピネ判35mm26枚 半澤中や木村権司が撮影したものが含まれる 詳細は佐々木史郎・赤澤威2000を参照	
		M33	民族1876	こね鉢	itto	樺太東海岸 敷香近郊	1	L28.5 W8.0 H5.0	祭事用 木製 長方形 耳付 モニ(こけもも・獸脂・百合根・筋子等をこね合わせた祭用の食品)を作るのに使用	
		M34	民族1877	こね棒	moniyou	樺太東海岸 敷香近郊	1	L8.5 W4.7 H20.0	祭事用 木製 スタンプ形 モニ(こけもも・獸脂・百合根・筋子等をこね合わせた祭用の食品)を作るのに使用	
		M36	民族1904	そり(模型)	okso	樺太東海岸 敷香近郊	1	L50.0 W14.0 H7.0	トナカイ様の木製模型	
		M35	民族1903	丸木舟(模型)	ugda	樺太東海岸 敷香近郊	1	本体L34.0 W5.5 H3.2 幅L15.3 W1.1	木製模型 楫2本付 元来ウイルタは信仰上の理由で舟を作らない	
		M52	民族1919	火打ち用具	silttu	樺太東海岸 敷香近郊	1	容器L10.4 W8.4 H4.0 火打金L6.1 W8.2 H2.4 火打石L5.3 W2.4 H1.5	楯製製容器(ウイルタ文様貼り付け)に木製持ち手付火打金と火打石入り	
		M53	民族1884	樹皮製食器	anduma	樺太東海岸 敷香近郊	1	L13.0 W9.5	白樺樹皮製 角に黒木綿縫い付け	
		寄贈資料	2011年7月20日		H23-03	ウイルタ土産物(皮製首飾り)		北海道か	1	ML39.0 (ペンダントトップL7.5 W10.0)
				H23-04-01	洞湯久治名刺		北海道	1	L9.0 W5.5	「日魯漁業株式会社北洋部外事係 洞湯久治」
				H23-04-02	洞湯久治名刺		北海道	1	L9.0 W5.5	「商船三井近海株式会社 囃註通訳 洞湯久治」
				H23-04-03	洞湯久治名刺		北海道	1	L9.0 W5.5	「ウイルタ語辞典編者 洞湯久治」

〔凡例〕

- ・函館博物館収蔵後に付された番号が「整理番号」→「コレクション番号」→「収蔵番号」であるため、その順番で整列してある。現在函館博物館では「収蔵番号」で資料を管理している。
- ・受入年月日を優先して、整理番号1と2の整列順番を逆にしている。
- ・整理番号3～5は洞湯久治以外の人物から購入した資料に当たり、本稿には関係ないため記載しない。
- ・「資料名」は函館博物館で資料管理に用いている名称であり、藏品目録に掲載されている「資料名」とは異なる(藏品目録には明らかな誤記や現代では適当ではない表現(「オロッコ」など)が多々あるため)。
- ・「別名」ならびに「備考」にある民族誌的内容については、洞湯1981を参考に筆者が付した。